

(9) ナス  
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
				青 枯 病	う ど ん こ 病	菌 核 病	黒 枯 病	す す か び 病	苗 立 枯 病	灰 色 か び 病	
アフェットフロアブル	ペンチラト	アミト	7		◎	◎		◎		◎	
アミスターオブティフロアブル	アゾキシストロビン・TPN	混合剤	11・M05		◎		◎	◎		◎	
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビリン	11		◎			◎			施設内が高湿多湿条件下、または散布後高温が予想される場合には使用しない。浸透性の高い展着剤及び液肥との混用は避ける。
インプレッションクリア	バチルス アミロクエファシエンス	生物農薬	BM02					◎		野	野：【野菜類登録】
インプレッション水和剤	バチルス スプーリス	生物農薬	BM02							野	野：【野菜類登録】
エコピタ液剤	還元澱粉糖化物	その他			◎						
オーソサイド水和剤80	キャブタン	その他	M04						◎		
ガッテン乳剤	フルチアニル	その他	U13		◎						
カンタスドライフロアブル	ホスカリト	アミト	7			◎		◎		◎	浸透性の高い展着剤や葉面散布剤との混用は避け、薬害等に注意する。
カーニバル水和剤	ジメトモルフ・TPN	混合剤	40・M05		◎			◎		◎	
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル	混合剤	10・1			◎	◎			◎	発生初期に使用し、その後は連用を避けて他剤と組み合わせて使用する。
ケンジャフロアブル	イソフェタミト	アミト	7		◎	◎				◎	
サブロー乳剤	トリホリン	SBI	3		◎						
サンヨール	DBEDC	有機銅	M01		◎			◎			夏期・高温時には、薬害を生じるおそれがある。
ジーファイン水和剤	炭酸水素ナトリウム・無水硫酸銅	混合剤	NC・M01		◎		◎				幼苗期の散布は避ける。
シグナムWDG	ピラクrostロビン・ホスカリト	混合剤	11・7		◎	◎		◎		◎	
ジャストミート顆粒水和剤	フェンハキサミト・フルジキゾニル	混合剤	17・12							◎	
ショウチノスケフロアブル	フルチアニル・メパニピリム	混合剤	U13・9		◎					◎	
スクレアフロアブル	マンデストロビン	ストロビリン	11			◎					
スコア顆粒水和剤	ジフェノナゾール	SBI	3		◎			◎			
ストロビーフロアブル	フルジキゾニル	ストロビリン	11		◎			◎			浸透性の高い展着剤との混用は避ける。
スミブレンド水和剤	ジエトフェンカルブ・プロシミト	混合剤	10・2			◎				◎	
スミレックス水和剤	プロシミト	ジカルボキシミト	2			◎				◎	
セイビアーフロアブル20	フルジキゾニル	その他	12							◎	
ダイマジン	イミダクワジリアル・シル酸塩・フェンハキサミト	混合剤	M07・17					◎		◎	
ダコニール1000	TPN	その他	M05		◎		◎	◎		◎	
ドーシャスフロアブル	シアゾファミト・TPN	混合剤	21・M05				◎				

農薬名	成分名	系統名	FRACコード	適用病害虫名							注意事項
				青枯病	うどんこ病	菌核病	黒枯病	すすび病	す立枯病	灰かび病	
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	ベンゾイミダゾール	1			◎	◎			◎	耐性菌の出現に注意し、他系統剤との組み合わせ防除する。
トップジンMゾル	チオファネートメチル	ベンゾイミダゾール	1			◎					耐性菌の出現に注意し、他系統剤との組み合わせ防除する。
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	SBI	3		◎			◎			
トリフミン乳剤	トリフルミゾール	SBI	3		◎			◎			
ニマイバー水和剤	ジエトフェンカルブ・ベニミル	混合剤	10・1		◎	◎	◎	◎		◎	
ネクスターフロアブル	イピラサム	その他	7		◎	◎	◎	◎		◎	
パレード20フロアブル	ピラジフルミト	その他	7		◎	◎	◎	◎		◎	
パンチョTF顆粒水和剤	シフルフェナミト・トリフルミゾール	混合剤	U06・3		◎						
ピカットフロアブル	ベンチオラト・マニピリム	混合剤	7・9		◎			◎		◎	
ピクシオDF	フェンピラサミン	アクト	17			◎				◎	
ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ	ストロベリリン	11			◎	◎			◎	
フォリオゴールド	タラキシLM・TPN	混合剤	4・M05		◎			◎			
プロパティフロアブル	ピリオフェン	その他	50		◎						
フルピカフロアブル	マニピリム	アニピリジン	9		◎					◎	
プロポーズ顆粒水和剤	ベンチアハリカルブイソプロピル・TPN	混合剤	40・M05					◎			
ベジセイバー	ベンチオラト・TPN	混合剤	7・M05		◎	◎	◎	◎		◎	
ベルクート水和剤	ミノクタジンアルベシル酸塩	その他	M07		◎			◎		◎	
ベルクートフロアブル	ミノクタジンアルベシル酸塩	その他	M07		◎		◎	◎		◎	
ベンレート水和剤	ベニミル	ベンゾイミダゾール	1			◎	◎			◎	耐性菌の出現に注意し、他系統剤との組み合わせ防除する。
ボトキラー水和剤	ハチルスズブチス	生物農薬	BM02		野					野	野：【野菜類登録】低温条件下では効果が劣るので使用を避ける。他剤と混用すると効果が発揮されない場合がある。
ポリオキシシンAL水溶剤	ポリオキシシン複合体	抗生物質	19		◎			◎		◎	
ポリベリン水和剤	ミノクタジン酢酸塩・ポリオキシシン複合体	混合剤	M07・19		◎					◎	【アザミウマ類、ハダニ類にも適用】
モベントフロアブル	スピロトトラマト	その他			◎						機能性展着剤を加用すると、果実表面にくぼみ状の薬害が生じる恐れがある。
モレスタン水和剤	キノキサリン系	その他	M10		◎						盛夏の高温時及び、施設内の高温時での使用は、薬害を生ずるおそれがある。
ラリー水和剤	マイクロタニル	SBI	3		◎			◎			
リゾレックス水和剤	トルクロホスメチル	有機リン	14							◎	
ルビゲン水和剤	フェナリモル	SBI	3		◎			◎			
ロブラール水和剤	イプロジオン	ジカルボキシミト	2			◎	◎	◎		◎	耐性菌の出現に注意し、他系統剤との組み合わせ防除する。
〈 種子消毒 〉											

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
				青 枯 病	う ど こ 病	菌 核 病	黒 枯 病	す す か び 病	苗 立 枯 病 R	灰 色 か び 病	
オーソサイド水和剤 80	キプロタ	その他	M04						◎		
リゾレックス水和剤	トルクロホスチル	有機リン	14						◎		
<b>く くん 煙 剤</b>											
スミレックスくん煙顆粒	プロシト	ジカルボキシミド	2						◎	耐性菌の出現に注意し、他系統剤との組み合わせ防除する。	
トリフミンジェット	トリフルミゾール	SBI	3		◎			◎			
ロブラールくん煙剤	プロシオン	ジカルボキシミド	2			◎			◎	耐性菌の出現に注意し、他系統剤との組み合わせ防除する。	

注1) 苗立枯病の対象病原菌の表記 R:Rhizoctonia

注2) イミダジン酢酸塩とイミダジンアベシ酸塩は、成分が「イミダジン」として取り扱われるので、使用の際は有効成分の総使用回数を超えないように注意する。







農 薬 名	成 分 名	系 統 名	IRAC コード	適 用 病 害 虫 名													注 意 事 項	
				ア ザ ミ ウ マ 類	ミ カ ン キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	ミ ナ ミ キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	コ ナ ジ ラ ミ 類	タ バ コ コ ナ ジ ラ ミ	オ ン シ ツ コ ナ ジ ラ ミ	ア ブ ラ ム シ 類	ネ キ リ ム シ 類	オ オ タ バ コ ガ	ハ ス モ ン ヨ ト ウ	テ ン ト ウ ム シ ダ マ シ 類	ハ モ グ リ バ エ 類	マ メ ハ モ グ リ バ エ		チ ヤ ノ ホ コ リ ダ ニ
モ レ ス タ ン 水 和 剤	キキサリン系	その他	M10													◎		
ヨ ー バ ル フ ロ ア プ ル	テトラエリプロール	ジアミト <sup>®</sup>	28			◎			◎		◎		◎					
ロ デ ィ ー 乳 剤	フェンプロパトリン	ヒレスロイト <sup>®</sup>	3A					◎	◎							◎		
<b>く く ん 煙 剤</b>																		
テ ル ス タ ー ジ ェ ッ ト	ヒフェトリン	ヒレスロイト <sup>®</sup>	3A									◎				◎		
マ プ リ ッ ク ジ ェ ッ ト	フルハ <sup>®</sup> リネート	ヒレスロイト <sup>®</sup>	3A						◎							◎		
モ ス ピ ラ ン ジ ェ ッ ト	アセタミプリト <sup>®</sup>	ネオコチノイト <sup>®</sup>	4A			◎			◎									

注1) スロピ<sup>®</sup>リ<sup>®</sup>系薬剤およびTPN剤とその混合剤との混用および近接散布を避ける。スロピ<sup>®</sup>リ<sup>®</sup>系薬剤を含む農薬を散布した後に本剤を使用する際は2週間以上間隔をあける。アセタミプリト<sup>®</sup>剤、トリフルメゾール剤、ペニシル剤、キア<sup>®</sup>カ<sup>®</sup>剤と混用しない。

(9) ナス  
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	一 般 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項	
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ 類	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	ハ リ ガ ネ ム シ 類	セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	青 枯 病	疫 病	苗 立 枯 病 R		半 身 萎 凋 病
ガスタード微粒剤 バスアミド微粒剤	ダゾメット	I:8F							◎	◎		◎	◎	
キルパ	カーバムトトリウム塩	I:8F							◎			◎	◎	
クロールピクリン	クロルピクリン	I:8B	◎	◎		◎	◎			◎	◎	◎	◎	
クロピクテーブ	クロルピクリン	I:8B								◎		◎	◎	
クロルピクリン錠剤	クロルピクリン	I:8B				◎				◎		◎	◎	
クロピク80 ドジョウピクリン ドロクロール	クロルピクリン	I:8B		◎		◎	◎			◎			◎	
ソイリ	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎	◎				
ダブルストッパ	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎	◎			◎	
ディ・トラペックス油剤	メチルイソチオシアネート・D-D	I:8F・8A				◎							◎	
テロ D C 油 剤 D - D	D-D	I:8A			◎		◎	◎						
トラペックスサイド油剤	メチルイソチオシアネート	I:8F				◎							◎	

注) 苗立枯病の対象病原菌の表記 R:Rhizoctonia



(9) ナス  
エ 残渣処理剤

農 薬 名	成 分 名	I R A C コ ー ド	使用目的	注 意 事 項
キルパー	カーバムトリウム塩	8F	前作のトマト又はミニトマトのコナジラミ類蔓延防止	使用目的以外での 使用不可
			前作の野菜類又は花き類・観葉植物の古株枯死	
			前作の野菜類又は花き類・観葉植物のアザミウマ類蔓延防止	
			前作のきゅうりのコナジラミ類蔓延防止	
			前作のイチゴのネグサレセンチュウ蔓延防止	
			前作のトマト、ミニトマト、ピーマン、とうがらし類又はきゅうりのネコブセンチュウ蔓延防止	
			前作のナスのフザリウム立枯病の蔓延防止	
			前作のねぎの収穫残渣に寄生したクロバネキノコバエ類蔓延防止	
			前作のキュウリの褐斑病の蔓延防止	

## オ 病害虫防除法（ナス）

### （ア）青枯病 *Ralstonia solanacearum*

#### （防除のねらい）

長ナスは丸ナスに比べて本病の発生は少ないが、特に台湾長、興津1号・2号など抵抗性のナス品種を台木とした接木栽培は発生が少ない。実用的にはトルバム・ビガ一台木が有効である。しかし、青枯病菌は変異性が強く、抵抗性台木でも侵される場合があるので他の防除法も併せて行う必要がある。

#### （耕種的防除法）

（1）接木栽培をする。

「総合的病害虫防除対策」の「耕種的あるいは生理生態的防除法」の項参照

（2）根が傷つくと発病しやすくなるので、窒素の過多や植え傷み、土壤水分過多に注意する。

### （イ）うどんこ病 *Sphaerotheca fuliginea*, *Erysiphe cichoracearum*, *Oidiopsis sicula*

#### （防除のねらい）

ハウス栽培で多発するが、露地では秋に多い。28℃前後で、通風が悪いと多発する。病勢が進んでからの薬剤効果は劣るため、初期防除に重点を置く。

#### （耕種的防除法）

（1）ハウス栽培では密植を避け、通風採光をよくする。

（2）不要な下葉は除去する。

### （ウ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

#### （防除のねらい）

（耕種的防除法） } キュウリの項参照

### （エ）黒枯病 *Corynespora melongenae*

#### （防除のねらい）

病原菌は被害茎葉、資材、種子について越年し、伝染源となる。

ハウスでは、25℃前後で多湿の場合に発病しやすいので湿度低下に努め、初期防除を徹底する。

#### （耕種的防除法）

（1）苗床やハウスの管理は高温多湿にならないようにする。

（2）初期発病葉は除去する。

（3）支柱などの資材の消毒を徹底する。

### （オ）苗立枯病 *Rhizoctonia solani*

#### （防除のねらい）

（耕種的防除法） } キュウリ項参照

### （カ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

#### （防除のねらい）

（耕種的防除法） } キュウリの項参照

#### （化学的防除法の注意事項）

耐性菌の発達を避けるため、ジカルボキシイミド剤の連用は避ける。

### （キ）褐紋病 *Phomopsis vexans*

#### （防除のねらい）

高温多雨期に発生しやすい。ハウス栽培での発生は比較的少ない。発病を認めたら薬剤散布を開始する。育苗時に罹病すると本ぼへ持ち込まれるので、育苗時の防除も実施する。

#### （耕種的防除法）

（1）排水をよくし、密植を避け、窒素質肥料の過用を避ける。

（2）被害株はできるだけ早く抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。

**(ク) すすかび病 *Mycovellosiella natrassii***

**(防除のねらい)**

ハウス栽培の多湿条件下で発病する。潜伏期間は25℃で10～15日程度である。発病初期の防除を徹底する。

**(耕種的防除法)**

- (1) 排水を図り、密植を避け、ハウスの換気に努める。
- (2) 水分過多に注意する。
- (3) 病葉は摘み取り処分する。

**(ケ) 半身萎凋病 *Verticillium dahliae***

**(防除のねらい)**

病原菌は土壌に残存し、土壌伝染する。トマト、ピーマン、フキ、イチゴ、花き類も侵す。苗床で感染すると被害が大きい。発生の多いほ場は接木栽培や土壌消毒を行う。

**(耕種的防除法)**

- (1) 発病ほ場はイネ科作物と4～5年間輪作する。
- (2) 接木栽培を行う。耐病VFナスはアカナス台木よりも発病が少ない。「総合的病害虫防除対策」の「耕種的あるいは生理生態的防除法」の項を参照。
- (3) 発病株はできるだけ早く抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。

**(コ) モザイク病**

トマトのモザイク病 **CMV, TMV** を参照

**(サ) ミナミキイロアザミウマ**

**(防除のねらい)**

葉のほか、花卉やガク内でも発生が多い。ガク内での加害は果実の傷となり、商品性を損なう。露地栽培では虫数が少ない梅雨明けまでの防除が大切で、多発すると防除が困難になるので、育苗時から防除を徹底する。

他は、キュウリの項参照

**(耕種的防除法)** キュウリの項参照

- (1) 紫外線カットフィルムは、果実の着色阻害を起こすことがあるので注意する。
- (2) 施設内では青色粘着シートを設置する。

**(化学的防除法の注意事項)**

- (1) 散布むらのないよう、整枝・剪定、摘葉を行う。
- (2) 葉裏や花卉等を重点的に散布する。
- (3) 抵抗性が発達しやすいので、作用性が異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

**(シ) ミカンキイロアザミウマ**

**(防除のねらい)**

**(耕種的防除法)** } ピーマンの項参照

**(ス) タバココナジラミ**

**(防除のねらい)**

被害は作物によって異なり、ナスではオンシツコナジラミと同様、吸汁害とすす病の発生による果実の汚れが問題となる。他はトマトのタバココナジラミの項を参照する。

**(耕種的防除法)** トマトの項参照

**(化学的防除法の注意事項)**

抵抗性が発達しやすいので、作用性が異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

**(セ) オンシツコナジラミ**

**(防除のねらい)**

**(耕種的防除法)** } キュウリの項参照

**(化学的防除法の注意事項)**

抵抗性が発達しやすいので、作用性が異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

## (ソ) アブラムシ類

### (防除のねらい)

ワタアブラムシとモモアカアブラムシがみられ、発生が多いと落葉を促し、果実が汚れたり肥大が悪くなる。施設では有翅虫の侵入防止対策を実施する。早期発見に努め薬剤は生息数の少ないうちに生息部位にかかるように散布する。

### (耕種的防除法)

- (1) 幼苗を寒冷紗で被覆し、有翅成虫の飛来を防止する。
- (2) シルバープラスチックフィルムや銀色ストライププラスチックフィルムなどでマルチを行う。また白色テープを畝上に3本程度張りわたすと有翅成虫の飛来が少なくなり有効である。

### (化学的防除法の注意事項)

抵抗性が発達しやすいので、作用性が異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

## (タ) ネキリムシ類

### (防除のねらい)

カブラヤガとタマナヤガが発生し、多くの野菜・花き類、雑草などを加害する。土壌中で中齢～老齢幼虫が越冬し、4～5月に成虫が出現する。年に2～3回発生し、春から秋までつねに各ステージの幼虫が見られる。若齢幼虫は葉を食害するが、齢が進むと昼間は土中にひそみ、夜間出てきて根際を切断する。雑草跡地などに植えつけると、被害が多発しやすい。

### (耕種的防除法)

- (1) 産卵期にはほ場を裸地状態にして、産卵を防止する。
- (2) 大きい苗を植える。
- (3) 植付後に被害株を発見したら付近の土を掘って捕殺する。

### (化学的防除法の注意事項)

雑草が繁茂し被害を受けるおそれのあるほ場では、定植時に粒剤・粉剤を予防的に使用する。

## (チ) オオタバコガ

### (防除のねらい)

### (耕種的防除法)

### (化学的防除法の注意事項)

} トマトの項参照

## (ツ) ハスモンヨトウ

### (防除のねらい)

施設内では冬季でも発生加害するので、秋季の飛び込み防止に重点を置く。幼虫の齢期が進むと防除が困難になるので、若齢幼虫の時期に薬剤散布を行う。

### (耕種的防除法)

- (1) 施設では、開口部に防虫網(5mm目合い以下)を張って、成虫の侵入を防止する。  
なお、防虫網上に産卵し、ふ化幼虫がネットの目をくぐり抜けて侵入することがあるので、注意する。
- (2) ふ化直後の集合加害している葉は、幼虫が分散する前に摘み取る。

### (化学的防除法の注意事項)

幼虫の生育が進むと防除が困難になるので、発生初期に若齢幼虫を対象に防除する。

## (テ) テントウムシダマシ類(ニジュウヤホシテントウ)

### (防除のねらい)

一般にピーマン、トマトは被害が少ないが、ナスでは成幼虫とも加害するため被害が大きい。成虫は幼果を好んで食害する。露地では6～7月に多く、ハウス栽培ではビニールを外すと被害が出やすい。ジャガイモの収穫が終わると成虫の飛来が急激に増加するので、その時期の防除を強化する。

### (耕種的防除法)

- (1) 春季の発生源となるジャガイモ畑の隣接地にナスほ場を設けない。
- (2) 成虫は幼果を好んで食害するので、栽培管理作業中に見つけた虫は必ず捕殺する。

### (化学的防除法の注意事項)

発生が次々と続くときは、幼虫ふ化期を目安に2～3回散布する。

**(ト) ハモグリバエ類 (トマトハモグリバエ, マメハモグリバエ)**

**(防除のねらい)** } トマトのマメハモグリバエの項参照  
**(耕種的防除法)**

**(化学的防除法の注意事項)**

- (1) 葉表を重点に散布する。
- (2) 多発時には連続散布する。

**(ナ) チャノホコリダニ**

**(防除のねらい)**

芯止まりになるほか、つぼみや果実にも寄生し奇形果になる。果実の表皮も乳白色～灰褐色に変色する。ナス以外に茶やサザンカ、クローバーなど多くの寄生植物がある。ほ場全面に発生することはなく、部分的に発生するので、防除は早期発見、早期防除が最も重要である。

**(耕種的防除法)**

- (1) 育苗は、茶やピーマンなど、本種の寄主植物の近くで行わない。
- (2) 雑草から移動するので、ほ場周辺の除草に努める。

**(化学的防除法の注意事項)**

- (1) 部分的に発生するので、発生か所を中心にスポット防除する。
- (2) 生長点部の葉の隙間や果実のヘタの隙間などに生息しているので、丁寧に散布する。

**(ニ) ハダニ類**

**(防除のねらい)**

カンザワハダニとナミハダニが発生し、ハウス栽培や露地の干ばつ時に発生が多い。高密度になると落葉や生育遅延をひきおこす。発生が多くなってからは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努める。

**(化学的防除法の注意事項)**

- (1) 合成ピレスロイド剤は、天敵に対する影響が大きく、リサーチェンス現象によりハダニが増加することがあるので、露地では極力使用を控える。
- (2) 抵抗性が発達しやすいので、作用性が異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。

**(ヌ) ネコブセンチュウ**

**(防除のねらい)** } キュウリの項参照  
**(耕種的防除法)**